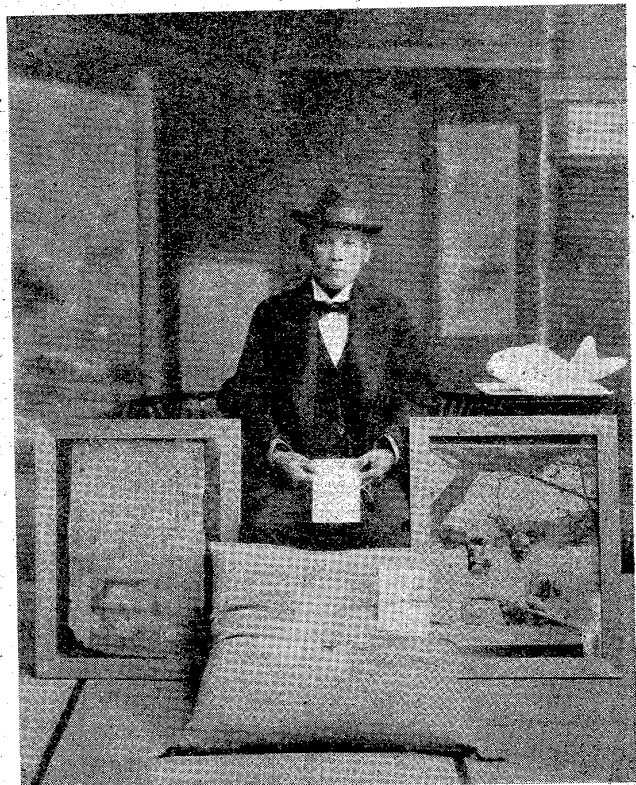


青木熊吉君喜壽の機會に際して

田 中 茂 穂

今年が青木君 77 歳に達するとなると、私より 14 年の年長者である。初めて君を知つたのは明治 34 年の春であつたと記憶する。それ故、君が大學に關係を持つやうになつてから、數年後であるし、君の 38 歳の年である。三崎實驗所も三崎町から油壺灣頭の荒井城趾へ移つて間もない時で、今に較べると、古色尙ほ濃く、如何にも幽蒼な感が深かつたもので、寄宿舍のある處はほんとの城趾であるので、此城が北條早雲父子の馬蹄にかゝつて滅亡した 7 月の命日には夜陰に鎧の草摺の音が聞へると言つて、賄の龍さんなどは大に恐れたもので、また寄宿舍續きの海へ面した小高い處では田舎相撲の催が時々その祭日に行はれ、大學の滞在者から金一封をその日に寄附した事などもあつた。

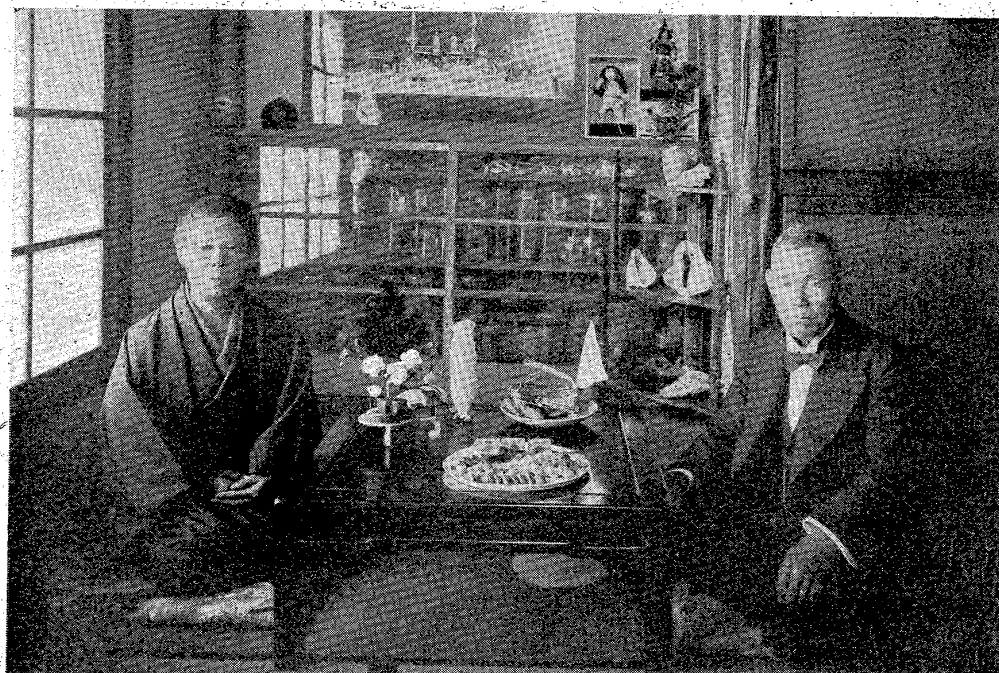
私達が大學々生時代には青木君は中々まめに働いたもので、研究に入用な動植物は自在に之を採集して吾々に提供して呉れたのはいいとして、それ等の生物が如何なる處に居て、如何なる方法で取り得るかを知る事の出来なかつたものも尠くない。つまり、之等の寶庫を隠して公表しないのである。それでもイソアワモチの居る處とか、イオリスの居る處などはお蔭でよく知る事が出来た。或時は大勢で闇夜の干潮に小網代灣内のヨジキノマラ(之は方言で、通名はウミシヤボテンと云ふ)の群落を青木君を嚮導として搜ぐつて、その放つ光の立派なのに驚いたものである。餘り深い處ではないが、荒井濱沖の岩蔭に居るマツカサウオを闇夜に手操網で漁獲したこともある。之は闇夜に岩蔭を出で、活潑に游泳するもので、下顎先端の下面にある左右に並んだ一對の黑色の大きい疣は強い光を發する。實際此の生きてゐるものを潮水を入れた硝子鉢に入れ暗い處へ運ぶと、殆ど螢の光りの強さで發光する。斯様な事は實に青木君に先づ教へられた仕事であつた。然るに此現象はその後の學者には知れないものが多かつたのは青木君の言



ふ處を無視したではないかと思ふ。それは一つはその發光器が如何にも發光器のやうに思へなかつたにもよるのである。此動物の發光現象の公知となつたのは大正 5 年 10 月 5 日發行の動物學雜誌によるのである。尤も此現象が發光バクテリアを宿す爲めのものである事のわかつたのはそれよりも後の事である。

ゴンズイを採るには夏に搗布^{カジメ}を束にして海中に浮べて置くと、これに澤山に集まる。之を教へたのも青木君である。

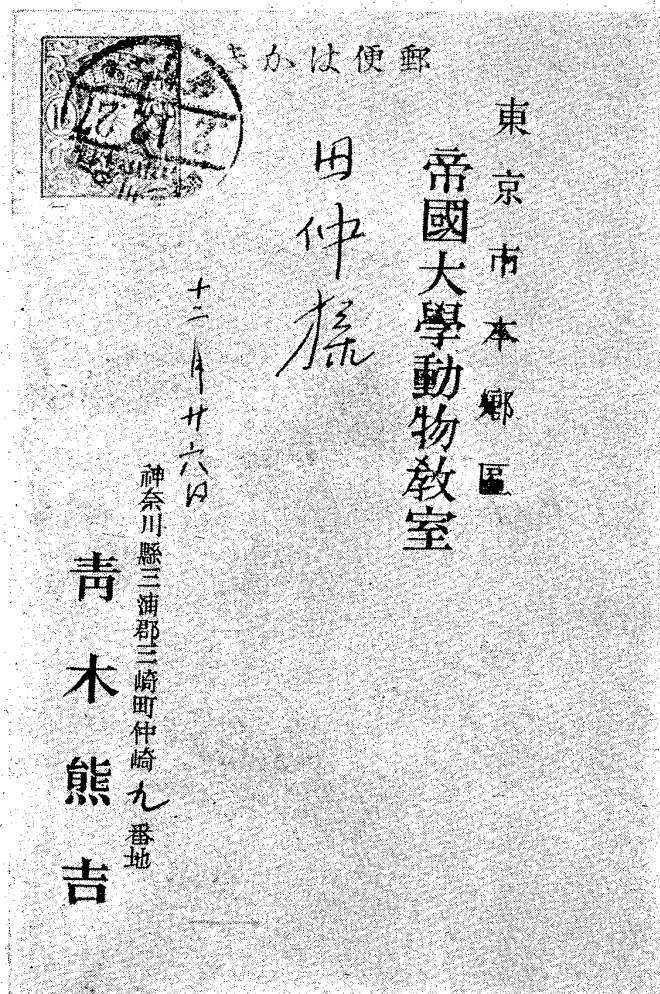
元來、漁夫として育つたのであるが、頭腦が明哲濟輩を抜いてゐるから、自然界の觀察に對しては頗る要を得てゐるし、船頭としての資格も多分にあつた。それ故彼が小舟を操る時には決して海上での間違は無かつた。然るに明治 38 年の暮（私が大學を卒業した翌年）に箕作佳吉先生の命によつて宮城縣牡鹿郡女川方面へ採集旅行に出かけたものである。此年は特別に寒氣が厳しく、出發の際は晝間から大雪であつて、夜行の汽車に乗る爲め本郷千駄木の私宅から出發した際には既に幾寸かの積雪があつた。同行は青木君であつた。然るに寒氣にやられたと見へて私は女川へ到着した日から消化器病に罹り、何とも仕様がなないので、仕方なく半島の突端まで進んで、青木君だけを漁船に乗組ませた迄は何とか順調であつたが、忽ち海上は暴風となつて、豫定の時刻にどうしても漁船が歸らない。色々と心配してゐたが、宿にしてゐた宿（漁夫の家である）の主婦が「此位の風は何ともない。何處かへ避難してゐる



であらうから、その内に歸つてくる。あなたが仕事があれば豫定の方面へ出掛けたいであらう」と言ふので、宿にばかり居てもつまらないから、石巻へ引つ返へして爰で魚の研究をすることにし、心を後に残しながら石巻へ歸つて來たのである。然るに一兩日経過しても青木君が歸つて來ないので、再び女川へ向つたが、途中で同君にバツリと出遇つて安堵の思ひをしたのである。聞く處によると、大風の爲め金華山へ近づいても、櫓が效かないで、南方へ追ひやられ、その爲め福島縣の相馬へ近づくと、忽ち南風となつて、之れ亦近づけないで、

飯島魁先生の六放海綿類の分類學的研究は世界的の大著であるが、その資料の多くは青木君の採集である。また箕作先生のユメナマコの資料はその生きた正體の分明した事に於て有

NII-Electronic Library Service



益なもので、之も青木君努力の結果入手し得たものである。

東京帝國大學動物學教室の開校せられて以後、數十年間、數多の貴重な研究が公表せられたが、其過半は青木君採集の資料によるものである。

青木君は最初は漁夫で、記憶が中々確である。文字を解しないが、併し 40 年前に實驗所に奉職してゐた土田兎四造君から片假名を覺へて、之をよく書いた。私は青木君から貰つた手紙を數十通貯へてゐる。その内で、學術的の通信で面白いと思はれるものを一つ爰に擧げる。

之は私の問合はせに對し、昭和 2 年 12 月 26 日附で私の貰つた解答である。之を本字に書き改めて見る。

「拜啓大變おしつまりまして嘸ぞ忙がしい事でありましよと思ひます。皆様は丈夫で結構です。皆様に宜しく願ひます。

また來春は是非お目に掛かりますから、御機嫌で下さいまし。

尙ほメバルの事もわかりました。メバルは冬の魚ですが、一番うまいのはクロメバルです。その次がキンメバルです。

アカメバルが一番まずいですから、その積りで下さいまし。

産卵は 1 月から 2 月まで小供を産みます。殆ど肉眼でわかる子供です。カサゴの子供と大さは同じ位です。

尙ほ申し上げます。此のメバルの三種類は夏は少ししかとれませんですが、たまにとれても、いつでもまずいです。其内でもアカメバルがまずいですから御承知下さいまし。

尙ほオニオコゼはとれ次第に送ります。これもすぐとれませんか溜めて送る。」

文意は頗る明瞭で、要を得てゐる。また、文の初と終とがよく整つてゐて、文體はいつでも此通りで、面白いと感じさせられる。

青木君は片假名は書けるが、平假名は讀めない。酒は全く不調法で、稀に無理して飲んで見ると、猪口を一つ二つ嘗めて顔が眞赤になつて、堪へられないと云ふ。その代り葉子は中々好きで、その爲め 10 年位前に數年間久しく胃腸病に悩まされたが、之は全快したので、誠に幸であつたと吾々はいつも思つてゐる。之と對照すべき人に清水金太郎（通稱、金兵衛）と云ふものがあつた。之も中々頭がよかつたが、之は平假名は書けるが片假名は解しなかつた。大

酒飲みで、宵越しの金は使はない威勢のいい男であつた。大正 12 年の震災の際には中氣症に陥つてゐて、身體が不自由であつて、生死全く不明となつた。多分、不慮の死に遇つたと思はれるが、誰も其終りをよう見届けなかつた。

青木君は理財家でもあり、多少、美術をも解し、人に親切で、よく長者を敬ひ、昔の漁夫としては中々よく出来た人といつも私は感心させられる。

動物に名稱の無い時に、青木君が時々名案を創出する。例へばハチ（蜂の意）、ツバメ（燕の意）などの魚名は多分青木君の發案である。キヌバリと云ふ魚は三崎での名稱か、それとも青木君の發案か、明でない（斯様な場合が往々ある）が、青木君は「絹を張つたようだ」（美しいの意）と説明をする。トシゴロと云ふ魚は三崎での名稱であるやうであるが、それに對する青木君の説明は（年頃の娘のやうに美しい）と云ふのであつて、當意即妙の技術に長じてゐて面白い。

料理も中々上手で、よく私はナメラフグを料理させ、煮込みにして喰べた事が一再でない。一體に漁夫には料理の上手が多い。

何と言つても青木君の妙技は漁業であるから、魚の事になると、中々有益な資料を持つてゐて、その話がいつも同一で毫も狂ひが無いから、一入感心させられる。昭和三年九月七日熊々三崎へ出掛け、泊りがけで二三日間青木君に魚の話聞いて、手帳へ控へたものである。

いつの頃であつたか、20 年位前と思ふが、青木君が拙宅へ訪れて、一泊して貰つた光榮を有してゐる。話がうまいし、その材料が多いから滾々として出る話は面白いばかりでなく、いつ迄経つても資料に盡きる事がない。

20 餘年前に飯島先生に伴はれて南洋を探検し、色々の見聞を弘めたものである。南洋では湯を「アクア・カリエンテス」と云ふと云ふのが、いつも自慢話である。色々と面白い逸話も輸入した。

諸磯沖へ出て、鰯釣りを教へられた事もある。矢張り上手で、吾々よりは多く釣り上げる。凡て仕事は中々器用で、よくまめに立ち廻はり、無駄骨を折らないで、急所々々を念入りによく仕了せる才能を持つてゐる。

私の大學生時代はまだ青木君の若い時代で、さほどでもなかつたが、追々と経験が積んで、老巧の域に達すると、動物の名稱を學名（これは横文字を發音する）でスラスラと喋るので、初めて之を聞いた人は大に驚かされた。よく新來の學生を集めて、一席長講を演ずると、凡てが大に感心させられたもので、「三崎の熊」と云つて名物男になつてしまつた。尤も得意なのは洋上に於ける鰹釣りの講話で、學生一同を集めて長講一席を演じ、皆その面白いのに驚いたばかりでなく、その話の筋合がいつも同調子で、殆ど印刷物を讀み上げるやうで、何度聞いても飽く事が無かつた。或時、來訪の一人が青木君に「熊が居るとの事であるが何處に居ますか」ときいたのであつたが、側に居た私は一寸面喰つて何の意味かと思つたのに、青木君即座に「それは私の事です」と答へたものである。青木君に就いて面白いのはサイパンガラスとシブングルスとが別種であることで、何時から取違へたものかは私にはわからない。

何れにしても三崎臨海實驗所に對しては忘るべからざる功勞者である。之から大に長壽を保たせて、長く名物男の記憶益々新なるやうにあらせ度いものである。